



「義認の教理についての共同宣言」の調印

500年近い論争に終止符か

リチャード・ジップル

日本ではあまり報道されなかったが、1999年10月31日にドイツのアウグスブルクで、カトリック教会とルーテル世界連盟との代表が「義認の教理についての共同宣言」に調印した。「義認の教理」についての理解は、ルターの宗教改革の一つのきっかけとなったが、論争の核心は、信者は神の恵みへの信仰のみによって義とされる（救われる）のか、あるいは救いには善行が伴わなければならないのか、ということであった。ルターは、信者は神の恵みの働きへの信頼のみによって義とされ（救われ）、その後精神や道徳を向上させる必要があるが、それは2次的なものであり、義認・救いには何の貢献もしない、と主張した。今回のカトリック教会とルーテル世界連盟の共同宣言では、義認は信仰によってのみ得られるが、善行は信仰のしるしだと確認している。上智大学教授百瀬文晃神父が指摘しているように、「ここで義認の教理についてカトリック教会とルター派教会とは共通の理解に達し、幾つかの相違点が残るにしても、それらは相互の断罪の理由にならないことを確認し、16世紀に双方からなされた断罪は今日の相手には当てはまらないことを確認した」という意味では、本当に画期的な出来事であると言える。（1999年11月14日の『カトリック新聞』を参照）

このニュースを聞いて、カトリックの教会史の権威である Philip Hughes の著書 *A Popular History of the Reformation* (Garden City, N.Y. : Hanover House, 1957) という本を思い出した。著者はルターとその改革活動についての記述の中で、ルターの初期の思想と晩年の思想とは多くの場合異なっており、場合によって矛盾していると指摘している。たとえば、1540年にルターは、カトリック教会の教えでは結婚が罪だとされていると主張した。しかし、1521年にはルターは、司祭の結婚は許されないと言う教皇の教えと、結婚は罪だと言うカトリック教会の中でも異端的な教えとを区別しているのである。Hughes によると、ルターの思想にこうした矛盾があるのは、ルターが最初考えたことについての記憶が、20年もの激しい論争の結果鈍くなっているからである。考えてみると、人の考え方がこうして時間が経つにつれて変わるものであるならば、ルターの宗教改革から約500年も経っている現在、義認の教理についての解釈や理解が変わっても不思議なことではないだろう。教会の分裂、数多くの犠牲者を出した宗教戦争のきっかけとなった義認の教理について、カトリック教会とルーテル派教会が合意に到達したことは本当に驚くべきことである。教理上の相違点はまだまだ残っているが、両教会がキリスト教諸教会の一致を回復する協力を引き出すことを期待してやまない。

ちなみに、宗教改革やルターに関する文献は数限りないが、A.G.ディキンズ著・橋本八男訳『ヨーロッパ近世史：ユマニズムと宗教改革の時代』（東京：芸立出版，1979）は、入門書として勧めたい。また「義認の教理についての共同宣言」の公式文書・訳文は、インターネットでも発表されている（ローマ教皇庁のホーム・ページ www.vatican.va や日本福音ルーテル教会のホーム・ページ www.jelc.or.jp を参照）。

（Richard SZIPPL：文学部教授）

三河地方の殉教者

名東カトリック教会主任司祭
五味 巖

輝くばかりの中国の隋と唐、韓半島の新羅の繁栄に鼓舞されて中大兄皇子を中心にした倭朝廷の貴族たちは、蘇我氏を倒して「大化改新（645年）」を断行し、官僚組織によって日本全国を統轄する確固とした基礎を作りました。「三河国」という呼称とその地域の境界はその時以来で、いくつもの流れからなる矢作川を贅えた地名であるようです。しかしながら三河の西は、境川によって因縁深い「尾張国」と、東は、豊川の東に広がる高師原台地によって「遠江国」に接し、北は「美濃国」と「信濃国」の山岳地帯に、南は、豊かで美しい海に面しています。

第1 九州から本州へ、二つの地域教会の誕生

（1549年のザベリオ渡来から1590年秀吉の全国制覇まで）

思い起せば今から凡そ450年前、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザベリオ（1506～1552）は、日本にキリストの福音を伝えるため、1549（天文18）年4月14日、イエス・キリストのエルサレム入城を記念する「枝の主日」を期し、同僚の司祭コスメ・デ・トルレスと修道士フェルナンデスと今回の日本宣教の機会となったパウロ（デ・フェ）弥次郎を伴い、印度のゴアを出発し、4ヶ月後の同年8月15日「聖母被昇天祭」に中国人の船に乗り換えて弥次郎の故郷である鹿児島に上陸しました。彼らが島津貴久を始め、行く先々で領主に遭うことが出来、歓待されたのは、日本仏教の「空想的な憧れの地、天竺（印度）」から来邦した高貴な人であったため、領主、仏僧、学者たちは「天竺」の本当の話が聞きたかったためでした。それに領主の前に並べられた「舶来の品々」、例えば香水、薬、宝石、楽器、眼鏡、磁石などは、宣教師たちのピロードのマントや美しい皮靴、航海士の武器などと共に貿易をすれば入手できるはずのものでした。その情報と売買条件など聞きたいことが山ほどあったに違いありません。

しかし、宣教師たちは自分たちを「貿易商」としてでなく「宣教師」として布教の許可と保護を求める真面目な「南蛮人」でした。その宗教の説明に仏教からの借用があったので最初のころは仏教の新しい一派と思われ、彼らの宿泊と布教のために仏教寺院の一角が与えられました。

2年4ヶ月の滞在でザベリオは日本を離れますが、今日のイエズス会の見解では受洗者数は意図的に誇大報告されているとのこと。同様に、念願した後奈良天皇と將軍足利義輝への拝謁は果たせませんでした。山口で一人の琵琶法師を、堺で豪商日比屋了慶^{リョウケイ}を、京都で同じく豪商小西隆佐^{リョウサ}をキリスト者として得ることが出来たのは特筆すべきことです。修道士になった琵琶法師は、イルマン（修道者）・ロレンソと呼ばれ、最も名高い説教家として日本語による説教の手本とされました。二人の豪商とその一族の受洗自体は少し後のことですが（了慶の受洗1564年）、単に宣教師たちの宿泊と信者の集会のために自分たちの家を提供しただけでなく、両家は堺の教会の二本の柱として「ライ病院の経営」など全く新しい社会活動にも入り、後には、迫害に対処しつつ一族あげて最後まで教会と信仰のために尽くしました。

ザベリオの離日後はコスメ・デ・トルレス（1570年歿）が日本イエズス会の長として教会を指導しますが、間もなく（1569年）織田信長の保護もあって、教勢は堺から京都、安土、岐阜と近畿一円に広がり、九州のどちらかと言うと領主を頂点にして「領民の集団改宗」を目指した農村・漁村型の教会に対して、世間でもよく知られた卓越した才能の持ち主で、個性的に力一杯生きようとする信者たちによる「都市型の教会」として発展しました。今日でも雰囲気として異なる九州と本州の教会の特徴は、フランスやイタリアのカトリック教会の本来的な二つの姿の再現であるようにも思えます。

第2 三河地方とキリスト教

(1590年 家康の関東国替えから1600年関ヶ原の戦いまで)

ところで、三河国(刈谷、岡崎、吉田が三大拠点)とキリスト教の出会いを調べるとキリスト教に好意的であった織田信長の「尾張」の隣国でありながら三河の教会に関する資料も、伝承も、殉教者の数も極端に少ないのに驚かされます。実は、今日でも三河の方言や生活感情は遠州に近く、「反尾張的」なことがあるように(明治の三河分県論、近くは教育大論争)、信長の時までは「駿河」の華やかな今川氏の勢力範囲にあり、「桶狭間の戦い(1560年)」に敗走してからは「西からの力に対する忍従」の歴史として様々なことが今日まで語り継がれています。しかも、苦難の歴史の中で培われた宗教心(特に浄土真宗)、排他的な郷土愛(特に尾張に対して)、強固な親族の絆などによって「家康礼賛」に結び付かない、例えば江戸幕府が禁じたキリシタンの伝承は意識的に消されたものと思われま

す。また、最初の宣教師たちは、「美濃」や「尾張」の多くの村で信仰が受け入れられたため、その対応に忙しく三河や信濃に足を伸ばすことが出来ませんでした。今日もある尾張と三河を区切るあの小さな「境川」は、関西勢の織田・豊臣の力を防ごうとした関東勢の今川・徳川の境界線であったのです。そのため、関西勢の保護を受けていた宣教師たちも、「時が来るまで」三河に入ることが出来ず「境川」が本州の西の教区の「境界線」にもなりました。「時」が来て、三河地方にキリスト教が入るのは秀吉が小田原城を落として東西の均衡を破り、全国の覇者として家康に「関東国替え」を命じて江戸にさがらせたためです。そのとき(1590年)秀吉は、自分の腹心の武将であった田中吉政(1548~1609)を岡崎城主に、池田輝政(1564~1613)を吉田(今の豊橋)城主に決めましたが領主と共に「国入り」した家臣団の中にキリシタンの侍が少なからずおり宣教師たちも自由に三河に出入りできるようになりました。

実は、信長や秀吉は琵琶湖での水運、江州米や薬の売買など経営的にすぐれた人物の多い「先進地」の近江から多くの部下を取り立てています。近江国高島郡田中の出である田中吉政もその一人で、彼は武将として信長、豊臣秀次、秀吉に仕え、キリスト教には非常に好意的で家臣には多くのキリシタンが居たことを伺わせます。

戦乱に明け暮れ、荒れ果てた小さな岡崎城に入った吉政は、新旧家臣団の融和と地域の活性化を図って最初に手がけたのが「土木工事」であったことは注目に値します。城の櫓と城門を一新し、東西に総堀りを掘り、土居を築くなどして城と武家屋敷を整え、「町屋」を作り、多くの寺の反対を押さえて東海道の道筋を変えて町屋に入るようにし、渡し場も変えるなど、岡崎の城下町を流通と商業の中心に作り変えました。計画の立案と実行は家康の残した家臣たちの協力なしには出来ないことで、結果的に領主と新旧家臣が互いに融和しました。そして、町造りは人々に仕事を与えただけでなく、秩序と平和による将来への希望を人々に与えたに違いありません。吉政の岡崎滞在は僅か十年でしたが、恐らく家康の薫陶を受けた「三河武士」の実直さなどに、改めて大人物としての家康の偉大さに気付いたと思います。1600年の関ヶ原の戦いには家康方に付き、戦後、勲功によって岡崎五万石から関西勢の今一つの本拠である九州で三十二万石の筑後の領主に抜擢されました。筑後でも彼は宣教師を優遇し、教会を作り、信者を積極的に保護しました。日本歴史付図によると、岡崎は(宣教師の駐在しない)教会所在地になっています。それは吉政のときのことを示していると思われるのは、岡崎を中心にしたその周辺は、家康を悩ませたはずの浄土真宗による宗教的結束が強かったこと、関ヶ原で勝利した家康は「先祖の地」を十人の領主に細分化して、「尾張の徳川家」の目付けにするなど庶民の間にキリスト教は広がらなかったことを推測させるからです。『カトリック大辞典』のキリシタン分布図も刈谷、岡崎に信者は残らなかったと言う立場を取っています。

他方、同じ付図の「東三河地方」にキリスト信者の所在を示すのは、田中吉政の岡崎入りと時を同じくして吉田(今の豊橋)城に入った池田輝政とその家臣団は、何といってもキリスト教が深く根付いていた「美濃国」から来たことによるためです。「美濃」と輝政が城主になる「播

磨」では、後に、集団的に多くの殉教者が出るのはそのことを物語っています。美濃国池田荘の出である池田氏では、輝政の祖母が信長の乳母であったこともあって信長、秀吉に仕え、「小牧・長久手の戦（1584年）」で大垣の城主であった父信輝と、岐阜の城主であった兄之助が討死したので、戦後、輝政が「美濃」の領主として個人の遺領を継ぎました。彼も「関ヶ原の戦」には家康方に付き、戦後十五万二千石の吉田から、五十二万石の播磨国姫路の領主になり、今日見る姫路城を造りました。晩年は、備前、淡路も含めた百万石の大大名として名を残しています。

第3 資料による考察：1600年の関ヶ原の戦まで

【三河の語源】

『愛知県の地名』（日本歴史地名体系 23 東京：平凡社，1981）568頁にある村瀬正章、歌川学氏の説に従った。レオン・パジェス（1814～1886）の『日本切支丹宗門史』下巻（岩波文庫 東京：岩波書店，1940）の1631年の項、註4でも三河、御油吉田と列挙しているのを見ると、矢作川周辺を三河と言っていたようです。

【1584年三河の領主が京に来て受洗した】

五野井隆史著『日本キリスト教史』（東京：吉川弘文館，1990）p.8

この記述は資料不足のため評価の仕様がありません。小牧・長久手の戦があった年で、そのような時に三河の領主が京都に行けたものか、と思います。

【1587年フランスコ・パシオ神父が三河で布教を始めた】

『日本キリスト教史』p.8

1584年の小牧・長久手の戦は、實質に於いて家康が秀吉の覇権を認める端緒になるので、宣教師が境川を越して三河に入ったことは容易に想像できます。

第4 資料による考察：1600年以降の江戸時代

レオン・パジェスが1869、1870年にパリで発表した名著『日本切支丹宗門史』上・中・下巻（岩波文庫 東京：岩波書店，1938-1940）は、秀吉の死（1598年）の時から家康、秀忠、家光の死（1651年）までの教会の様子を宣教師たちからの報告と書簡によって詳述しています。

【1598年の本文考察】

『日本切支丹宗門史』上巻 第一編第一章：1598-1599年（p.20-35）

俄かに力を得た家康は、巡察使バリニアーノが送った宣教師に今後宗教の事について全く安心せられよと諭しています。秀吉の「禁教令」に反することが目立たないようにしながら、政治的見地と貿易のため（宣教師が通訳など）としても受洗者は全国的に驚くほど増え、他方、平戸や長崎では領主の後継者や奉行が「禁教令」を盾に激烈な迫害をするなど様々なことが交錯しています。

【1601年の本文考察】

『日本切支丹宗門史』上巻 第一編第三章：1601年（p.60-77）

関ヶ原の戦に勝利して全国の覇者になった家康のもとでは、家康の三河時代以来、彼が最も信頼した参謀の本田政信は公然とキリシタンの教を褒め、宣教師のため色々尽くしてくれ、他方、家康は長崎奉行に宣教師たちの邪魔をしないことを命じ、当時最も大事な町とされた京都、大阪、長崎に神父たちが居住する「朱印状」二通を与えています。朱印状はキリシタン隆盛の時のような安堵感を全国の教会に与えました。

（この年、家康は田中吉政に換えて、本田康重を岡崎城に入れています。康重は、家康の先祖の地、岡崎を預かったと言う自覚と吉政の治世を手本に在地の人々を大切にし、温厚で地味な政策をとったようです。康重が死去すると（1511年）その子、康紀、更に忠利と続きます。吉田と違って、今日までキリシタンの遺物も伝承も無いのは「地の信者」の数

は少なく、信仰は継承されなかったためのようです。)

【1610年の註三について】

『日本切支丹宗門史』上巻 第一編第十二章：1610年 (p.238-249)

ある神父が尾張、丹後に伝道し、「最後に三河に第三の伝道があった。」(p.248)は、フランス語の原文を見ないと、第一・第二の伝道がどこであったか分かりません。同じ年、駿河伝道から京への途中、神父が三河のキリシタンを訪問した、と述べています。

【1611年の本文考察】

『日本切支丹宗門史』上巻 第一編第十三章：1611年 (p.250-267)

このころ未信者の大名まで領内で自由に説教することを許し、宣教師たちの援助をし、同年の註三 (p.265) には伏見の神父が関東に行ったとき、美濃、尾張、伊勢、三河、駿河、武蔵で成人 270 名に洗礼を授けたことが報告されています。三年後の大阪の陣を控え両陣営の政治的思惑が絡んでいます。家康は 1606 年以降キリシタンの頂点である司教セルケイラを始めとしてイエズス会、フランシスコ会、ドミニコ会の各長上を引見して、仏教に対するように彼の体制に組み入れようとしています。教会の長上たちに家康の苦悩に人間としての同情と共感が無いのが残念です。

【1613年の註二について】

『日本切支丹宗門史』上巻 第一編第十五章：1613年 (p.301-324)

駿河の家康を表敬訪問した神父が江戸、駿河、美濃、尾張、伊勢、播磨、備前、豊前、筑前を訪問した (p.318) とあって、往復の通り道である三河の名が欠けているのは注目すべきです。

【1616年の本文考察】

『日本切支丹宗門史』上巻 第一編第十七章：1615-1616年 (p.387-429)

大阪冬 (1614 年)、夏の陣 (1615 年) から家康の死 (1616 年) までの各領地内は実に平穏で、その間に教会は力を回復し、宣教師たちは領内に向かって盛んに伝道しました。一つの報告では 3 人のイエズス会の神父が伏見、津、丹波、尾張、伊勢、越前、加賀、能登を巡歴した (p.401) と述べ、美濃と三河がありません。

【1616年の本文考察】

『日本切支丹宗門史』中巻 第二編第一章：1616年 (p.6-15)

家康が死去した年の 9 月、将軍秀忠は改めて「追放令」を発表し、宣教師やその協力者に宿を貸したりした者は火炙りの刑で財産は没収、罪人の妻子と両隣五軒も同罪 (p.6) と公示されました。そして、以後、江戸と京、上方の幕府の直轄地を中心に大迫害が全国に広がります。

【1620年の本文考察】

『日本切支丹宗門史』中巻 第二編第五章：1620年 (p.127-166)

後に殉教するイエズス会のベント・フェルナンデス師は京から江戸に向かうのに近江、美濃、尾張、伊勢、三河、及び遠江の諸国、そして駿河の城下を訪れています (p.136)。これらは皆かつてのキリシタンの中心地であったので殉教者と背教者、そして教会の実情を探るのが、本当の目的でなかったかと思えます。

【1631年、将軍家光の治世 8 年の註について】

『日本切支丹宗門史』下巻 第二編第十六章：1631年 (p.189-206)

駿河に 5 人、三河に 5 人、御油に 5 人、吉田に 2 人、牛久保に 1 人、丸山に 1 人、千々岩に 2 人の殉教者が出たこと (p.201) を伝えています。

その他の文献

1. 『家忠日記』または、『家忠日記増補追加』のどちらかに、バテレンが深溝 (現在の額田郡 ^{フコウス})

幸田町、当時は松平氏の領地)に來たと書き留めているそうです。

2. 『忠利公御日記写』の1631(寛永8)年12月5日、17日、26日に前述の吉田の殉教者と思われる記事があります。(『豊橋市史』第三巻 p.97)

本稿は1998年夏に開催された「名古屋教区付司祭会議」での講演を編集したものである。

(Iwao GOMI: 名東カトリック教会主任司祭)



聖フランシスコ・ザビエル渡来450周年記念国際シンポジウム'99に参加して

山辺 美津香

1999年12月4日(土)~5日(日)に上智大学で開催された「聖フランシスコ・ザビエル渡来450周年記念国際シンポジウム'99」に参加した。昨冬の国際シンポジウム'98を受けて、2年目の今回は、ザビエルを起点としたヨーロッパとアジア世界の出会いのその後の推移を「アジア世界におけるヨーロッパ・キリスト教文化の展開」というテーマで追跡している。初日は「キリシタン文化とその歴史的意義 - ザビエルの蒔いた種は結実したか」、また2日目は「文化と宣教 - ザビエルを越えて21世紀へ - 」と題して8名の優れたパネリストの発表と作家加賀乙彦氏並びにヨーゼフ・ピットウ大司教の基調講演及び対談を含む非常に質の高い内容であった。同時に人間ザビエルの生き様とその人となりに触れて導かれていった人々の熱意が、常に会場に満ち溢れた素晴らしい2日間であった。特に印象深かった講演の要旨を記して報告としたい。

キリシタンの「^{こころあ}心死て」

講演者 尾原 悟師(上智大学文学部教授)

フランシスコ・ザビエルを極東の日本まで赴かせたものは、キリストの「いかに人遍界をたな心に握るといふとも、其の身のあにまをうしなわば何の益ぞ」(マルコ 8:36)「汝等世界を巡り諸の御作のものにエワンゼリヨを弘められるべし」(同 16:15)という呼びかけであった。何の支配も利権も利潤をも背景としないザビエルは、まさにこの「すべてのものに福音を述べ伝えよ」というメッセージに動かされ人間としての出会いを求めていたのであった。そして日本では異文化との衝突の中で、「万事にこえてデウスを^{ごたいせつ}御大切に思ひ奉り、また我が身を思ふごとく、ぼろしもを大切に思へ」(マタイ 22:37.39)と教え、病み苦しむ人々を看取り、若い魂を育むことをその証とした。だからこそ、常に失敗と迫害と挫折の中でも、信念をもって突き進んでいったのである。

ザビエル自身は2年余りのわずかな日本滞在の間には大きな実りを見ることができなかった。しかし、その志と祈りとは後に続く宣教師達によって受け継がれ、セミナーヨ、コレジヨなどの設置、活字印刷機による「キリシタン版」の著作・出版活動を通して、異質な伝統と文化、さらには、言葉の厳しい隔絶を超えた人間としての生命の共感と出会いとに結実していった。

アニメ、すなわち人間性の尊厳、人格性の豊かさを究める『ドチリナ・キリシタン』、『日本のカテキズモ』、『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』、『妙貞問答』の流れとエワンゼリヨ、すなわち異質な他を認め、自らをも活かす出会いがキリストの最後の派遣メッセージであり、数多くの殉教者を支え、七代250年にわたって潜伏キリシタンを導いた「^{ごたいせつ}御大切」である。これらのキリシタン書は「ペアデレと日本人イルマンたち」とそれを支えるあらゆる層のキリシタンた

ちとの日々の生活からにじみで、生命をかけるまでの大切な思いが生み出した「キリシタンの心宛て」であった。

韓国の価値体系とキリスト教

講演者 イ・ウォン・スン（李元淳）氏（ソウル大学校名誉教授）

シャマニズム的基層信仰をふまえた儒仏、とくに儒教社会とその歴史性が規定されている朝鮮王朝でのキリスト信仰の受容は、刮目すべき意義を持つ事象であった。それは単なる異質宗教の受容による信仰生活の変化をもたらすだけでなく、価値意識の変化を促して徐々に儒教的朝鮮封建社会の崩壊を促進し、近代化の歩みを促す価値意識の韓国社会適用契機を造成する歴史展開の局面であった。

朝鮮王朝でのキリスト教受容は朝鮮後期 1784 年、一団の知識人による信仰共同体の創設としてのカトリック信仰の受容と、それから 100 年後に最初の宣教師の入国によってプロテスタント信仰が受容されるというように二元的に展開された。カトリック信仰とは、性理学価値社会であった朝鮮王国後期にいたり、虚学化した性理学的儒学が漸次拡大進化する儒教社会の矛盾を解決する歴史的機能を果たし得ない現実に鑑み、その突破口を求めて興っていた実学運動の経学研究によって明らかにされた「天」の思想と、進歩的少壮学者の漢訳西学書研究を通して意識された「天主」との思想的融着の結果もたらされた新学問的価値体系であった。それは 1 万名内外の殉教者を排出しながらも漸進的に農村庶民社会に浸透していった。他方、プロテスタント信仰は、19 世紀後半、朝鮮王朝の開港政策と歩調を合わせるかのように朝鮮近代社会に受容された。改新教ともいわれるプロテスタントは教育医療事業を通じて文明開化に努めながら、韓末日帝支配下の民族苦難期に民衆と一致団結することで急激に教勢をのばし、韓国近代化に貢献した。

1831 年に朝鮮教区が設定され、西洋修道伝道会が司牧権を把握することになったカトリックには、政教分離、聖職者中心、典礼中心の司牧方針の固執によって社会的影響力が低迷した時期もあったが、光復、それに続く韓国戦争の困難な時期を乗り越えた後、信仰の社会化、土着化の原則を押し出した第二ヴァチカン公会議の好影響、その後の積極的な韓国民主化闘争参与などによって多数の帰依者を得、現在では刮目すべき教勢の発展と社会的影響力を発揮する位置をしめている。

(Mitsuka YAMABE : 図書館事務課)

日本カトリック大学連盟図書館協議会 999 年度実務研究会に参加して

山辺 美津香

標記研究会（1999 年 12 月 3 日開催 於：白百合女子大学）において東京純心女子大学図書館長澤田昭夫氏が「カトリック大学における図書館のあり方」と題して講演された。カトリック大学およびその図書館はどうあるべきかについて、豊富な資料と米国の具体的事例を挙げながら描かれたビジョンに、目標を見失いがちな日常を深く反省させられた。以下にその要旨を記して報告としたい。

現代の大学は視界不良のまま、その水準を低下させ、大学教育の淵源にあるパイディア＝人文教養、人間教養、人間作りから大きく軌道を外れてしまっている。また価値観の多様化が家族や社会、あらゆる倫理的規範を崩壊させ、混乱を来している。米国でも多文化主義の名のもとに相対主義、唯名論による普遍的な人文教養の崩壊が始まって久しい。

第二バチカン公会議後、公会議の本来の意図歪曲を図る新アリュウ主義が台頭する。すなわち、学問と信仰、大学と教会を分離させ、学問の視野を見える世界だけに限定、狭隘化しようとする考え方である。この結果、教会では伝統や歴史感覚の喪失、ローマ離れがおこった。ま

たこの事はカトリック大学にも同様の影響を及ぼした。230 余のカトリック大学を擁する米国では学問の自由と大学の自治の名のもとで教会からの独立を求めたランド・オブ・レークス声明「現代カトリック大学の本質」(1967)が出され、大学の世俗化、水平化、コア科目廃止などによってカトリック大学のアイデンティティ喪失の危険が生じた。日本のカトリック大学においても国公立大学など、一般の大学に追従しようとする政策が先立ち、時流に迎合しようとする傾向が大きい。

バチカンでは 1990 年 8 月 15 日付けで「カトリック大学憲章」と俗称されるローマ教皇ヨハネ・パウロ 2 世使徒座憲章を公布した。この憲章の各国への適用については、ローマと各国司教団、そして大学連盟の綱引きが続いた。米国のカトリック大学の大多数は 9 年に渡ってこれに抵抗し、日本においては、1991 年に英訳からの試訳が上智大学総務部から出されていたが、日本における適用についての議論が具体化したのは 2 年前であり、約 7 年にわたって放任されていたことになる。

カトリック大学は、可視界だけでなく不可視界をも包含する広い視野、絶対超越者に対する畏敬心をもった倫理的人格形成に寄与し、「魂の洗練」としての教養教育、「心の教育」のための不可欠の機関であるはずである。従って、カトリック大学図書館は真理の探究を促し、自由と生きがい、確かな人生観、永遠の生命への招きとなる教養(含専門)図書館となるべきである。

(Mitsuka YAMABE : 図書館事務課)

資料寄贈者(前号以降~1999.12)

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈していただきました。ここに名前を掲載させていただき、改めて謝意を表したいと存じます。

[個人]

西村純一氏、小松淳氏、熊木建郎氏

[団体]

カトリック津教会、聖母カテキスタ会、神言会日本管区センター

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第 13 号 2000.1.1 発行 南山大学図書館「カトリック文庫」委員会

編集委員: 笹山達成、山辺美津香、牧野多完子

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

ホームページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/dyuna/midashi.htm>

E-mail: library@ic.nanzan-u.ac.jp TEL:052-832-3163 FAX:052-833-6986 担当者: 笹山

編集後記:

今回は、元本学非常勤講師で名東カトリック教会主任司祭の五味巖師よりご寄稿いただきました。師には、東山教会在任中に本学カトリック文庫への資料寄贈にもお骨折りいただいています。ここであらためてお礼を申し上げます。師のような研究者にも本学カトリック文庫をより多く利用していただけるよう資料収集・整備をしていかなければならないと決意を新たにす次第です。(笹山)